文化

原高史「私のおなたの家はどこ

一九六〇年代末から八〇年代初めまでに生まれた七作家の出品で、絵画のほか布や液晶、発光ダイオードの作品、映像を使ったインスタレーションなどが並んでいる。

速水史朗「オバ色」（同展図録）

というほどの意味だ。とらえどころがなく、あいまいに受け止められている色の魅力を再考する機会にもあ

本番強い脳外科医オケ

◇激務で合わない練習時間、年2回の学会で集中力◇

松谷雅生

「手術を始めます」「お願いします」。この言葉が発せられる時、それは外科医にとって最も厳粛な瞬間だ。この緊張感は実は、オーケストラで指揮者が指揮棒を振り下ろす瞬間とも似ている。

常任指揮者も招く

日本の脳神経外科医でオーケストラを結成して二十二年目になる。団員は現在七十人。主に年に二回、「日本脳神経外科コングレス」と「日本脳神経外科学会」の学術総会で演奏を披露している。最初は比較的小編成で演奏できるものが多かったが、近年はワーグナーやベルディのオペラや大編成の交響曲にも挑戦している。もちろん、全曲ではないのだが。

日本医学会では唯一の学会員によるオーケストラである。名付けて「Musica Neurochirurgiana」。イタリア語で、直訳すると「脳神経外科医による音楽集団」となる。団員は皆、いわゆる脳外科医。演奏する作品によって人数が足りない時は、団員の家族や医学生にも参加してもらう。ちなみに私のパートはバイオリンで、オケの事務局長もしている。

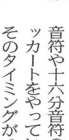
学会は、どうも固い雰囲気になりがちだが、何か芸術を取り入れられないか。

2005年の学会での演奏

一九八七年の日本脳神経外科学会の高倉公朋会長の声が設立のきっかけだった。東大時代に学生オーケストラに参加していた私は全国の大学に、弦楽器のできる脳外科医はいないか問い合わせてみた。すると二十数人が名乗りを上げてくれた。早速弦楽合奏団を組織し、学会懇親会で現在の常任指揮者である早川正昭氏が作曲した、「バロック風 日本の四季」の第三楽章「秋」でデビューした。

当初は学会があるたび、会場となる地域から指揮者を探し、演奏当日に皆で合わせるだけで本番を迎えていた。すると徐々に団員の出席率が悪くなった。やはり、芸術的目標もない活動はつまらないのだ。そこで東大の学生オケを長く指導されていた先述の早川氏に九九年、常任指揮者に就任していただいた。途端に団員の意識が変わった。毎年合宿をやるなど練習量も増やし始めた。

それでも脳外科医の合同練習は難しい。一般に、平日の帰宅は早くて夜九時。週に少なくとも一回は当直があって、他にも急患で夜中までになる日がある。もちろん皆、個人練習しているが、早川氏には「直前の練習ではどうなることかと思った。皆さん、本番に強いですね」といわれる。



脳外科医という仕事の自身の限界を超えて何かせいかもしれない。私たちの手術は七―八時間はザラで、二十時間を超えることもある。長いけれど、本当に集中しなければならない局面はいくつかで、あとは緊張を保ちながら決められた作業を粛々とこなす。どうもオーケストラでは「集中時間」は本番にしか訪れないようなのだ。

♪　♪　♪

拍動のリズムでオペ

でもおそらく、音楽活動は本業にも役立っている。例えば、手術中の動脈からの出血は心臓の拍動のリズムに乗っている。拍動と拍動の間に出血がゆるむ瞬間があり、そこが止血操作のタイミングである。普段、八分音符や十六分音符のスタッカートをやっていて、そのタイミングがつかめないはずはない。直接は役立たなくても、本業を離れて、個人とチームで加者も多い。モーツァルトの「交響曲四十番」第一楽章を演奏した時のこと。米国人は「いやあ、たいしたものだ」と褒めてくれたが、ドイツ人は「それで二楽章はいつやるの？　余計なことだけど学会の開会式に短調の曲はおかしくない？」。お国柄の違いというか、音楽への造詣の深さの違いというか。そんなものがいとおしかった。

♪　♪　♪

本業に通じる創造性

時には失敗もある。松本市での学会で野外のステージで長野冬季五輪のファンファーレを演奏しようとした時は、強風で楽譜が飛ばされ、かなり怪しい演奏になった。

昨年はオーケストラの創立二十周年を記念して、一般の方にも聴いていただこうと、学会の市民公開講座の参加者の前で演奏した。来年五月には、国際脳腫瘍学会が初めて日本で開催される。その会場で、脳腫瘍の子供たちのためのチャリティーコンサートを開こうと考えている。私たちの演奏でお金をいただくのはおこがましいので、プロの独奏者をお招きして協奏曲をやりたいと思う。

アマチュアオケの特徴は豊富な練習量だが、私たちは技術が不十分な上にそれが欠けている。それでも二十年以上活動を続けている。外科学と芸術に共通する創造性に魅力を感じているためだと思う。もっと多くの仲間に参加してほしいと願っている。（まつたに・まさお＝埼玉医科大学国際医療センター病院長）

交遊抄

の鬼

学生時代、心の中心にはいつも音楽があった。キャンパスは大学紛争で荒れていたが、北大では軽音楽サークルに入り、趣味のギターに没頭。当時、藤女子短大の学生だった歌手の大橋純子さんも一緒に活動する仲間だった。卒業後の

と渋い光沢、漆のつやが奇妙な形と呼応しておかしみを誘い、親しげにささやきかけてくる。ギャラリーせいほう（東京・銀座）で六日まで。

（編集委員　宝玉正彦）